

「令和五年白川学館春季皇霊祭」

春季皇霊祭は、毎年春分の日に行われる祭祀であり、秋分の日秋季皇霊祭と同様に、歴代天皇・皇族をお祀りする祖先祭となります。

遡れば、皇室における祖先祭は陵墓で執り行われることが中心でしたが、平安時代に入ると御所に場所が移され、仏式による御黒戸(おくろど)に歴代御皇霊の位牌が安置されておりました。

その後、明治期に入り位牌は京都の泉涌寺に移されますが、御皇霊は明治22年に皇霊殿に奉祀されて現在に至っております。

春分・秋分の日はこの春秋皇霊祭が執り行われるのは、真西に沈む太陽に西方の極楽浄土を想い、太陽信仰と祖先崇拜が浄土思想と結びついた祖先供養の彼岸行事が日本には根付いていたからです。

祝日法にはそれぞれ趣旨が定められていますが、春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」、秋分の日「祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ」とされており、祖先祭祀の日としての意義は存続しております。

～七澤賢治先生「はふりめく」より抜粋～

ここに八垂(やたれ)という形がありますが、これは皇霊というものの一つの表現なんですね。我々は、各先祖ということで、父母、祖父祖母、曾祖父曾祖母、高祖父高祖母という分け方をしますが、これは天皇の場合ですと、天と地という形で、それを結ぶという形が一つの姿ですね。八垂(やたれ)と言うか、4つと8つで、32という数がある、左右に結ぶと言うか、柱もそうですが、天御柱、国御柱という形の繋がりが両方であると。

それは、まさに御皇霊なんですね、皇と霊(御幣の上と下)なんですね。そういう形で出来てますね。天皇家の遠津御祖神が、まさに天と地を繋ぐという器の教えなんですね。そして、その広がり、いわゆるお国体机ということですね。これは、全て八方位を表現するようになっているわけですね。八方位になっているものが、お国体机ですね。

ですから天皇陛下がまさにこの姿を取られるわけです。お国体になってそしてその上に御皇霊を乗せると。これは民や国土そのものもですが、その上に天津神を迎えると。それを繋げてくださるのが御皇霊ということですね。我々もそうですね。遠津御祖神がなければ、自然の神も、国津神も天津神も判らないわけですね。これが日本の祖先崇拜と言ったらなんですが、大事な部分ですね。

～～～～引用ここまで～～～～

日本列島には、大陸の楽舞が伝来する前より、古来伝わってきた歌や舞がありました。祭祀、饗宴、喪葬の場などで琴などの伴奏とともに奏され、『古事記』『日本書紀』にも、「コト」「フエ」「スズ」などが大和言葉で多数記され、弥生時代や古墳時代の遺跡からもそれらが出土しています。

また列島各地の歌舞は、日本列島を統一し中央集権国家が形成されていく中で、特に大君(天皇)の観覧に捧げる儀礼などを通じ宮廷に採り入れられていくようになります。

これらの歌舞を、国風歌舞(くにぶりのうたまい)といいます。
宮中では春秋皇霊祭において、宮内庁楽師によって「国風歌舞」から「東遊(あずまあそび)」が奉演されます。

「東遊 (あずまあそび)」

「東遊」の構成は「一歌」「二歌」「駿河歌」「求子歌」「大比礼歌」の五つから成り、白川学館では昨年の秋季皇霊祭におきまして「駿河歌」の奉演を行わせていただきました。そしてこの度の令和五年白川学館春季皇霊祭では、常日頃より当学館の活動にご尽力いただいております西原祐二先生、貴子先生を、再び祝殿にお招きし「一歌」「二歌」を奉演いただくはこびとなりました。皆様のご参加を心よりお待ちしております。